

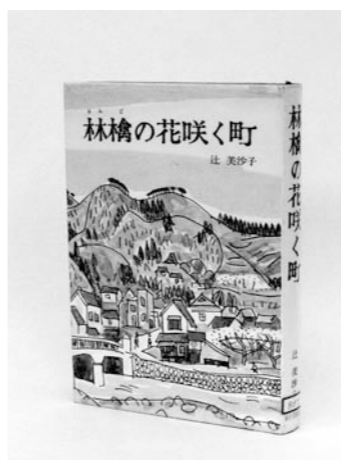
作家

辻美沙子を知っていますか



辻美沙子
鷹巣農林高校2年生の頃
(昭和26年)

辻美沙子は母の旧姓と名前からとったペンネーム。高校時代から同人誌などで使っている。当時の本名は佐伯孝子。



代表作の一つ「林檎の花咲く町」
昭和38年家の光協会発行

家の光協会が昭和36年に公募した新人懸賞長編小説に第一席で入選し、翌年の1月から12月まで雑誌「家の光」誌に連載され、38年には映画化もされた(岩内克己監督、東宝作品)。

日本の植民地支配下の韓国・木浦^{もつぽ}で生まれ、「家」の宿命から生涯で四つの姓を持つことになるなど、波乱の生涯を送った作家がいました。本市とゆかりの深い辻美沙子さん(1934-1999)です。

辻さんは、家族とともに戦後日本に引揚げると、小学校から鷹巣農林高校時代までの6年間を鷹巣で過ごしています。

その後、東京に転居し、大学卒業後から作家の道を歩みます。昭和36年には、最も多感な青春時代を過ごした高校時代を舞台として描いた「林檎の花咲く町」という題名の青春小説が懸賞小説で第一席に入選、38年には白川由美主演で映画化されました。当時の人気歌手高石かつ枝が歌った同名の主題歌を口ずさんだ方も多くいらつしやると思います。

辻さんは平成11年に亡くなられていますが、今年になって一市民の手によりその業績と人物像などが一冊の資料集にまとめられました。

また、母校鷹巣農林高校では、後輩たちの願いからこの9月、42年間眠っていたフィルム「林檎の花咲く町」の上映会が実現しました。

広報ではこの機会に、辻さんがどのような生涯を過ごされ、また、どのような作品を書かれたのか、その一部を各種資料と同級生の皆さんなど関係者のお話しなどをもとにご紹介します。

少女小説・青春小説でスタートした作家活動

辻さんの作家活動は、大学卒業後から始まります。幼少時代から少女小説に親しんでいたことから、少女たちに夢を持つてほしいと、雑誌「ひまわり」など主として少女雑誌に連載小説を執筆、全国に多くの愛読者を持っていました。

最も脚光を浴びたのは、昭和36年、家の光協会の新人懸賞長編小説で「林檎の花咲く町」が第一席に入選したときでした。翌年、日本最大の発行部数を誇る雑誌「家の光」に1年間連載されるとともに、38年には白川由美主演により映画化され、また同名の映画主題歌が全国で広く歌われました。この年、母校鷹巣農林で講演会を行っています。順風満帆の作家活動を続けていた頃でした。

苦難に耐えながら執筆を続けた半生

ところが、交通事故と出産をきっかけに、生来の特異体質から寝たきりの生活になってしまいます。せつかくの上り調子が途絶えてしまった時期です。それでも、妹さんの口述筆記により、病床にありながらジュニア小説の執筆は続けました。

また、昭和45年には、目標にしていた作家三島由紀夫の自決、さらに、昭和48年には師である林房雄氏の死去と精神的なショックから、創作への意欲に大きな影響を受けます。

辻さんは、生まれたときに仙台の伯母(母の姉)の養女と負っていました。この頃、自身の生い立ちや血族を題材にした大河小説(「揺籃を動かす手」)

の執筆を始めていますが、一部のみで未完に終わったのは、このような事情があったからかもしれません。

その後、昭和50年代になると少女時代から熱狂的なファンであった宝塚についての本を出版します。特に、昭和54年の「鳳蘭物語」は、当時大きな話題となった宝塚歌劇「ベルサイユのバラ」ブームとも重なり、20万部のヒットとなりました。

平成に入ると、世界日報という新聞に、韓国時代の生活を詳細に描いた「無窮花(ムグンファ)を知らず」(後に「無窮花を知らなかった頃」として単行本化される)や師・林房雄の回想記を連載します。このいずれの連載も100回以上にわたるもので、確かな記憶力と資料の正確さに裏打ちされた力作です。



●辻さんの資料集を刊行された河田弘美さん(61歳、下家下)

河田さんは元鷹巣町職員(収入役で退職)で鷹巣OB。教育委員会の生涯学習課長当時から辻さんの足跡をまとめはじめ、今年3月、退職を機に資料集を刊行されました。

資料集には、辻さんの作品の一部や辻さんからの書簡、恩師の先生らの思い出を綴る文章、当時の写真などが355ページにわたって収められています。この資料集は、鷹巣図書館に収蔵されていますので、ぜひ一度ご覧ください。

辻美沙子 年表

- 昭和9年3月4日
旧朝鮮木浦府生まれ。本名孝子。父は石上新一、母は阿仁出身のミサヲ(旧姓辻)。出生時に仙台の伯母(母の姉)の養女となり、佐伯姓となる。
- 昭和20年8月15日
木浦山手国民学校在学中に終戦を迎える
- 同年 11月
家族で日本(鷹巣)に引揚げる。美沙子は仙台で半年ほどを過ごし、後に鷹巣に。
- 昭和21年
2学期から鷹巣国民学校6年生に転入。病弱で学校は休みがちだったが、読書に明け暮れる。
- 昭和22年4月
新学制になった鷹巣中学校に入学。3年生の頃、雑誌「ひまわり」に韓国時代の思い出をもとにした小説を投稿している。
- 昭和25年4月
女学校と統合になった秋田県立鷹巣農林高校普通科に入学。文芸部と演劇部に所属、多感な高校時代を過ごす。
- 昭和27年3月～
父の仕事の関係で東京に転居。和洋女子大学付属国府台高校を経て同大の家政学部に進む。大学時代、祖父と同郷(九州)のよしみから作家・林房雄に師事する。卒業後、少女小説を中心に作家活動を始める。
- 昭和33年
婦人生活社の懸賞小説に「教授の館」が入選(佳作)。
- 昭和36年
長女の出産で生死をさまよう。家の光新人懸賞長編小説に「林檎の花咲く町」が入選。翌年同誌に連載されたほか、38年に映画化され、話題となる。
- 昭和38年9月
「林檎の花咲く町」が単行本として出版される。母校鷹巣農林高校で受賞祝賀会が開かれ、講演を行う。
- 昭和39年～
長男の出産と交通事故の影響で寝たきり生活を送ることになる。
- 昭和51年～
「虹のファンタジア(51年)」「揺籠^{ゆりかご}を動かす手(52年)」「鳳蘭物語(54年)」「無窮花を知らなかった頃(平成7年)」刊行。世界日報に「回想の林房雄(122回)」連載(昭和63年)。
- 平成11年6月16日
埼玉県浦和市白幡にて永眠